

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 10 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21530497

 研究課題名（和文） リスクと監視と個人化の行方  
 —個人と社会を「切りつつ結ぶ」こと—についての研究

 研究課題名（英文） Risk Surveillance and Individualization  
 :Risk Society and the Individual

研究代表者

三上 剛史（MIKAMI TAKESHI）

神戸大学・大学院国際文化科学研究科・教授

研究者番号：80157453

研究成果の概要（和文）：今日のリスク社会、監視社会、そして個人化を行方について、一定の視角を獲得することができた。その成果は、以下に示す論文、著書において明らかにしている。

得られた重要な結論は以下の各点である。①今日のリスク社会においては、リスクと監視と個人化が密接に関連し合っており、それぞれの事象は、深い繋がりを持ちつつ同時に進行しているという点。②そのような現代社会と見る視角として、新たに、ディアボリックな視点が強調されるべきであり、これまでのようなシンボリズムに立った社会理論形成は限界を呈しつつあるということ。

研究成果の概要（英文）：Several important results were acquired about present day risksociety, surveillance society and individualization. They are made public in the following academic papers and books.

Important results gained in this study are two points. (1)Risk, surveillance and individualization have close relation in our risk society. (2)In order to understand this situation, new theoretical standpoint should be required that is based not on the symbolism but on the diabolism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学史

1. 研究開始当初の背景

現代社会学は「ポスト近代」的諸理論によ

る近代批判、あるいは「リスク社会」と「監視社会」という新たな状況に直面して、理論的にも実践的にも多くの課題と困難を抱えている。より具体的には、ネオリベリズムの進展とポスト福祉国家における「社会」的なものの危機、リスクの個人化がもたらす「個人」的なものと社会的なものとの断絶あるいは境界の曖昧化、そしてそこから派生する、「連帯」「道徳」「信頼」などの、これまでの社会を可能にしてきた社会的装置の信憑性と妥当性の喪失などである。

## 2. 研究の目的

現代社会において「社会的なもの」はいかにして再概念化され、「個人」はどのようなものとして表象されるべきなのかを明らかにすること。もしも個人と社会が、近代社会学が想定していたような仕方で結びつかないのならば、一体、社会と個人という二つの概念はどのようにして可能となるのか。これがある一定の段階まで見極めることが課題である。

## 3. 研究の方法

第一は、古典的理論と現代的理論の対比から、個人と社会を対照項として設定することの理論的妥当性を検証することである。

第二は、上記の理論的吟味から得られた結論から現代社会理論を再構成し、リスクと監視、ポスト福祉国家とリスクの個人化、ネオリベリズムと「社会の終焉」などのテーマを再考することである。

## 4. 研究成果

リスクに対応して、信頼と連帯を新しく作り出そうとする試みは、ディアボリックなもの自覚なしには危ういものとなることが明らかとなった。リスク社会を、人々の結合と、個人と社会の結びつきのみを指向する社会モデルで説明することは困難であろう。個人化するリスク社会において、我々は善くも悪くも分離されており、それを踏まえて初めて、新しい形での個人と社会のあり方が構想されるはずであるという結論が得られた。その内容は、以下に記す学術論文と学会報告、並びに著作において公開された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 三上剛史「ディアボリックなものとシンボリックなもの—リスク社会の“危険”—」、『日仏社会学年報』(日仏社会学会)、査読有、第21号、2012年3月
- ② 三上剛史「<個人化>する社会の個人」、『社会学史研究』(日本社会学史学会)、査読有、第33号、2011年6月
- ③ 三上剛史「モノドロジーと社会学」、『国際文化学研究』(神戸大学国際文化学研究科紀要)、査読無、第34号、2010年7月、
- ④ 三上剛史「<個人と社会>再考—「と」の理論と現在—」、『GCOE 国際共同研究4—公共圏と「多元的近代」の社会理論』

(京都大学)、査読有、2010年4月

- ⑤ 三上剛史 「個人の〈個人化〉と主体の奸計—「個人」ということ—」、『国際文化学研究』（神戸大学大学院国際文化学研究科紀要）、査読無、第33号、2009年12月

[学会発表] (計11件)

- ① 三上剛史 関西社会学会大会シンポジウム『3・11以前の社会学』報告：「リスク社会と“ディアボリックなもの”」、2012年5月27日（皇學館大学）
- ② 三上剛史 STS ネットワーク・ジャパン・シンポジウム『科学技術社会論のルーマン』報告：（「ルーマンと“ディアボリックなもの”」、2012年3月25日（東京大学）
- ③ 三上剛史 デュルケーム - デュルケーム学派研究会研究報告：「モノドロジーと社会学—意識システムとモノド—」、2011年11月14日（大谷大学）
- ④ 三上剛史 日仏社会学会シンポジウム『リスク・不安・格差—3・11以後の社会を考える』報告：「ディアボリックなもの」とシンボリックなもの—リスク社会の“危険”」、2011年10月22日（東京日仏会館）
- ⑤ 三上剛史 京都大学グローバルCOE、「モダニティから見た公共圏の理論的検討」研究会報告：「公共圏と親密圏のディアボリズム」、2011年9月20日（京都大学）

- ⑥ 三上剛史 関西学院大学災害復興制度研究所学術講演：「個人化する社会のリスクと連帯」、2010年12月10日（関西学院大学）

- ⑦ 三上剛史 ウルリッヒ・ベック来日記念シンポジウム『個人化する日本社会のゆくえ—ベック理論の可能性』報告：「個人化論の位相：「第二の近代」というフレーム」、2010年10月31日（一橋大学）

- ⑧ 三上剛史 デュルケーム - デュルケーム学派研究会、討論者、2010年10月23日（京都学園大学）

- ⑨ 三上剛史 佛教大学開学100周年記念学術講演会講演：「現代社会と個人—個人化、リスク、公共性」、2010年7月15日（佛教大学）

- ⑩ 三上剛史 日本社会学会史学会大会シンポジウム報告：「〈個人化〉する社会の個人」、2010年6月27日（奈良女子大学）

- ⑪ 三上剛史 京都大学グローバルCOE、「公共圏と『多元的近代』の社会学理論」研究会報告：「〈個人と社会〉再考—「と」の理論と現在」、2009年9月26日（京都大学）

[図書] (計4件)

- ① ウルリッヒ・ベック他編 『リスク化する日本社会—ウルリッヒ・ベックとの対話』、共著、岩波書店、2011年、8月、pp. 37-51

- ② 井上俊他編 『社会学的思考』、共著、世界思想社、2011年5月、pp. 105-114
- ③ 早川洋行編 『よくわかる社会学史』、共著、ミネルヴァ書房、2011年4月、pp. 30-43
- ④ 三上剛史 『社会の思考—リスクと監視と個人化—』、単著、学文社、2010年3月、pp. 140

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三上 剛史 (MIKAMI TAKESHI)  
大学院国際文化学研究科・教授  
研究者番号：80157453

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：